

保育所と放課後児童クラブの遊びのつながりに関する予備的研究

— 自由記述の計量的な分析を通じて —

浅井 拓久也 森下 嘉昭

1. 研究目的と背景

本稿では、同一地域における保育所と放課後児童クラブ（以下、学童、学童クラブ）における遊びのつながりに関して実態と課題を明らかにすることを目的とする。保育所卒園後の子どもの生活や遊びの連続性、継続性の重要性から、保育所保育と学童のつながりを円滑かつ効果的なものにする示唆を得ることを目指す。

乳幼児期の子どもにとって、遊びは身体的、精神的な発達のために重要なものである。保育所保育指針では、「生活や遊びの中で、自分の身近な人の存在に気付き、親しみの気持ちを表す。」「生活や遊びの中で様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする。」というように遊びのなかで様々なことを学ぶことが期待されている（厚生労働省2017）。平成30年施行の保育所保育指針では、保育所にも幼児教育の一翼を担うことが求められているが、幼児教育の充実のためにも遊びの充実が必要になることが指摘されている。

一方、学童においても、子どもにとって遊びは重要な役割をもっている。学童での育成支援においては、「子どもが安心して過ごせる生活の場としてふさわしい環境を整え、安全面に配慮しながら子どもが自ら危険を回避できるようにしていくとともに、子どもの発達段階に応じた主体的な遊びや生活が可能となるように、自主性、社会性及び創造性の向上、基本的な生活習慣の確立等により、子どもの健全な育成を図ることを目的とする。」というように、遊びを通じて子どもの自主性や生活習慣の育成を目指すことが目的として設定されている。また、本目的を達成するため、運営指針は「児童期の遊びと発達」、「遊びと生活における関わりへの配慮」のように、遊びを中心とした構成になっている（厚生労働省2014）。

子どもにとっての遊びは乳幼児期、学童期ともに重要なものであるが、乳幼児期と学童期の遊びの接続やつながりもまた重要なものである。乳幼

児保育の側からは、保育所保育指針改定の議論のなかで「卒園後に放課後児童クラブを利用する子どもが、保育所における生活や育ちとの連続性が確保された環境で活動ができるよう、保育所と放課後児童クラブとの間で情報交換の機会を設けるなど、地域の実情に応じた取組を行うことも望まれる。」と指摘されている（厚生労働省2016）。また、学童保育の側からは、「新1年生については、子どもの発達と生活の連続性を保障するために、保育所、幼稚園等と子どもの状況について情報交換や情報共有を行う。」と指摘されている（厚生労働省2014）。

このように、子どもの発達は乳児期から幼児期の遊びや生活を経て学童期へと連続しており、こうした連続性のなかで積み重ねられてきた子どもの様々な側面の発達や育ちが小学校以降の生活や学びの基盤となっていく。ゆえに、遊びの継続性や連続性というつながりは子どもにとって重要なのである。

しかし、保育所の遊びと学童の遊びに関するそれぞれの研究は数多くあるが、遊びのつながりに関する先行研究は必ずしも十分ではなかった。とりわけ、学童における遊びの研究は、学童での遊びのあり方に関する研究（代田2010、代田2011）、学童施設内外の物理的な空間に関する研究（赤星他2011、山田・渡邊2011、中川・山田2015）、支援員と遊びの関係に関する研究（林2013、上村他2013）のように、学童内における遊びに焦点をあてたものであり、保育所との遊びのつながりを検討したものはなかった。

以上から、保育所と学童の遊びのつながりや乳幼児期の遊びと児童期の遊びの円滑な移行のあり方を検討することが重要な課題として設定できる。保育所から学童への子どもの生活や育ちの連続性を保障するためには、遊びのつながりを考えることと不可分だからである。

もちろん、保育所の遊びと学童の遊びのつながりを検討するという課題を解題するためには制度

的、実践的な観点のみならず、理論的、実証的な分析が必要となる広範囲かつ複合的な研究が必要になる。しかし、これらすべてを本稿で扱うことは現実的ではない。そこで、本稿では保育所と学童の遊びのつながりに関する予備的な研究を行う。

具体的には、第一ステップとして、保育所と学童での遊びや遊びに対する考えの実態や課題を明らかにする。また、保育所と学童の遊びのつながりを検討することからすれば、同一地域内の保育所と学童の関係が重要である。保育所卒園後に利用する学童は同一地域内であることが大半であるため、同一地域内の保育所の遊びと学童の遊びについて検討することで、本稿の目的を達成できるからである。

以上から本稿では、保育所と学童の遊びのつながりについて、同一地域内の保育所と学童での遊びに関する実態と課題を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 調査概要

調査対象として、ある地域内の公立保育所と学童クラブを用いた。保育所と学童クラブを管轄する県担当者と相談のうえ、保育所10施設（保育士138名）、学童クラブ36施設（支援員198名）に質問紙を配布した。このうち、保育所9施設（保育士68名）、学童クラブ8施設（42名）より回収した。回収率は保育所90%（保育士49%）、学童クラブ22%（支援員21%）であった。

調査期間は3月10日から4月10日とし、期間内に返信があったもののみ分析に用いた。

調査内容については、性別、雇用形態、経験年数など基本的な属性を問う項目（フェイスシート）と、遊びに関して選択式で回答する項目と自由記述する項目とした。質問項目の設定においては、県担当者の意見を取り入れた。選択式では自由保育の時間や内容に関する質問、自由記述では遊びに関する質問をした。自由記述では、保育所内や学童内での電子ゲーム（アプリによるゲームも含む）の利用状況、子どもに人気がある（よくやっている）遊び、遊びを充実させるための環境構成などを質問した。

本研究では研究目的と関係のある、「保育所（学童）内で子どもに人気のある遊びは何ですか」、「保

育士（支援員）として、遊びを充実させるために気を付けていることは何ですか」、「保育士（支援員）として、子どもの遊びに関わるさいに気を付けていることは何ですか」、「保育士（支援員）として、異年齢での遊びについて気を付けていることは何ですか」の4つの質問（自由記述）に対する回答を分析に用いた。

なお、誤字脱字のような明らかな記述の間違いは執筆者の判断で修正した。また、子どもの名前や個人情報に関わる固有名詞が明記されていた記述は分析から除外した。

(2) 分析方法

各質問について、次のように分析を行った。まず、「保育所（学童クラブ）内で子どもに人気のある遊びは何ですか」について、保育所では性別、月齢別（0歳から5歳）、室内外別に単純集計を行った。学童では性別、学年別（低学年、中学年、高学年）、室内外別に単純集計を行った。このように整理したのは、子どもの遊びは性別や年齢、場所によって異なるからである。なお、保育所、学童のいずれも後述するKH Coderを用いて集計し、抽出語、出現数として整理した。

次に、「保育士（支援員）として、遊びを充実させるために気を付けていることは何ですか」、「保育士（支援員）として、子どもの遊びに関わるさいに気を付けていることは何ですか」、「保育士（支援員）として、異年齢での遊びについて気を付けていることは何ですか」について、まずKH Coder(2.x)を用いて共起ネットワークを抽出し、次にIBM SPSS Text Analytics for Surveys(4.0.1)を用いてカテゴリ化を行った。

KH Coderを用いたのは、テキストデータを単語や句に分節し、出現数や単語間の相関関係を抽出することができるからである。自由記述の分析ではKJ法が採用されることが多いが、分類の過程や分析枠組みの設定のさいに研究者の主観や仮説に影響を受けやすいという問題があった。KH Coderでは、共起ネットワークなどを抽出するさいに出現数やJaccard係数の閾値を設定するが、これらを除けば自動的に抽出が可能となる。また、共起ネットワークはテキスト内で出現パターンが類似している（共起している）単語やその関係を明らかにすることができる。共起ネットワークは、出現数が多い単語ほど大きな円となり、共起する単

語は線で結ばれ、その度合いが強いものほど太い線で描かれる。共起ネットワークから、保育所や学童で共通に語られる内容が整理でき、両者の比較が容易になる。なお、本稿では出現数は3以上、Jaccard係数の閾値は0.3に設定した。

共起ネットワークの抽出に続いて、IBM SPSS Text Analytics for Surveys(4.0.1)を用いてカテゴリ化を行った。まず、分析対象となるすべての記述をソフトに取り込み、カテゴリ化を行った。カテゴリ化においてはすべての抽出結果に対して言語学的手法で名詞のみを抽出した。研究目的からすれば、「なる」、「思う」のような単語を抽出する必要性は必ずしも大きくないことから、感性分析ではなく言語学的手法を採用した。一方で、名詞を選択したのは、名詞は話題やテーマを表現し、回答者が語る内容を明らかにすることができるからである。なお、本稿では最大検索距離は3に設定した。

(3) 倫理的配慮

調査対象となる保育所と学童クラブに質問紙を郵送したさい、調査に関する説明文を添付した。説明文では、調査目的と概要、回答は学術研究の目的でのみ使用されること、自由意志および無記名によること、回答のデータ入力後は質問紙を適切に破棄することなどが記されており、同意できる場合に限りて回答し返送することにした。

本研究では、返送された質問紙について同意があると分析に用いた。

3. 結果と考察

(1) 「保育所(学童クラブ)内で子どもに人気のある遊びは何ですか」

まず、保育所と学童それぞれの単純集計結果を確認する。

表1.1 「保育所内で子どもに人気のある遊びは何ですか」(男子)の結果

(1) 0歳児

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	外遊び	3	室内	ボタン落とし	14
	散歩、散策	2		ふれあい遊び	13
	園庭遊び	1		音の出るおもちゃ	8
	外気浴	1		探索	5
	砂遊び	1		ちよちよちあわわ	4

(2) 1歳児

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	砂遊び	8	室内	車	15
	外遊び	3		ふれあい遊び	13
	散歩	2		絵本	11
	すべり台	1		ブロック	10
	プール	1		ボール	10

(3) 2歳児

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	砂遊び、砂場	13	室内	ブロック	18
	しっぽとり	7		電車	11
	追いかっこ	7		パズル	9
	鬼ごっこ	3		車	9
	かくれんぼ	2		ごっこ遊び	7

(4) 3歳児

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	しっぽとり	14	室内	ブロック	21
	かくれんぼ	13		ごっこ遊び	14
	鬼ごっこ	12		パズル	11
	砂遊び	7		電車	6
	追いかっこ	6		ふれあい遊び	5

(5) 4歳児

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	鬼ごっこ	18	室内	ブロック	17
	ドッジボール	13		集団遊び	10
	転がしドッジボール	10		コマ	6
	水鬼	8		トランプ	6
	縄跳び	5		パズル	6

(6) 5歳児

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	ドッジボール	43	室内	ブロック	16
	鬼ごっこ	22		トランプ	12
	サッカー	14		集団遊び	11
	ケイドロ	10		コマ	9
	水鬼	9		お絵かき	5

表1.2 「保育所内で子どもに人気のある遊びは何ですか」(女子)の結果

(1) 0歳児

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	外遊び	3	室内	ふれあい遊び	13
	散歩	2		ポットン落とし	12
	砂遊び	2		音の出るおもちゃ	6
	園庭遊び	1		絵本	5
	外気浴	1		玩具	5

(2) 1歳児

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	砂遊び	11	室内	ふれあい遊び	14
	外遊び	2		絵本	14
	散歩	2		ポットン落とし	8
	すべり台	1		ボール	7
	プール	1		まてまて遊び	5

(3) 2歳児

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	砂遊び	14	室内	パズル	14
	しっぽとり	6		ブロック	9
	追いかっこ	5		ごっこ遊び	8
	かくれんぼ	3		ふれあい遊び	5
	すべり台	2		むっくりくまさん	5

(4) 3歳児

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	しっぽとり	15	室内	パズル	11
	砂場遊び	11		ブロック	10
	かくれんぼ	10		ごっこ遊び	7
	鬼ごっこ	9		ふれあい遊び	7
	追いかっこ	4		お絵かき	6

(5) 4歳児

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	鬼ごっこ	12	室内	お絵かき	12
	ドッジボール	8		パズル	8
	転がしドッジボール	7		ごっこ遊び	7
	氷鬼	6		トランプ	7
	縄跳び	5		塗り絵	7

(6) 5歳児

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	ドッジボール	27	室内	お絵かき	16
	鬼ごっこ	14		折り紙	10
	氷鬼	7		トランプ	8
	縄跳び	6		ごっこ遊び	7
	ケイドロ	4		集団遊び	7

表2.1 「学童クラブ内で子どもに人気のある遊びは何ですか」(男子)の結果

(1) 低学年

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	サッカー	24	室内	ブロック	11
	ドッジボール	17		ボードゲーム	8
	砂遊び、砂場	16		コマ	6
	鬼ごっこ	10		トランプ	5
	バドミントン	6		お絵かき	4

(2) 中学年

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	サッカー	32	室内	ブロック	10
	ドッジボール	23		ボードゲーム	9
	砂遊び、砂場	12		将棋	8
	鬼ごっこ	7		かまぼこ落とし	12
	キックベースボール	6		トランプ	6

(3) 高学年

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	サッカー	24	室内	将棋	5
	ドッジボール	16		かまぼこ落とし	4
	キックベースボール	7		ブロック	4
	鬼ごっこ	6		工作	4
	砂遊び	6		マンガ	3

表2.2 「学童クラブ内で子どもに人気のある遊びは何ですか」(女子)の結果

(1) 低学年

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	縄跳び	21	室内	お絵かき	14
	一輪車	8		折り紙	11
	ドッジボール	7		ぬり絵	9
	砂遊び	7		トランプ	9
	鬼ごっこ	6		ブロック	5

(2) 中学年

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	縄跳び	13	室内	お絵かき	9
	ドッジボール	11		折り紙	8
	鬼ごっこ	9		トランプ	7
	バレーボール	7		ウノ	4
	大縄	7		ブロック	4

(3) 高学年

抽出語		出現数	抽出語		出現数
室外	バレーボール	10	室内	ピアノ	6
	ドッジボール	9		マンガ	5
	鬼ごっこ	5		トランプ	3
	縄跳び	4		ボード	3
	ハンドボール	3		絵かき	3

表1、表2は、KH Coderによって抽出された抽出語と出現数を整理したものである。保育所の遊びと学童の遊びのつながりという観点からは、表1.1の5歳児と表2.1の低学年(男子の結果)、表1.2の5歳児と表2.2の低学年(女子の結果)に着目する。確かに、子どもの遊びは発達に伴って変化し、断続的につながっていることからすれば、0歳児の遊びから順次確認していくことも重要である。しかし、保育所の遊びと学童の遊びが最も近づくのは5歳児の遊びと低学年の遊びであることから、ここでは表内の5歳児の遊びと低学年の遊びに着目する。

男子の場合は、保育所の室外遊びではドッジボールが最も人気があり、次に鬼ごっこ、サッカーと続いている。一方、学童の室外遊びではサッカーが最も人気があり、次にドッジボール、砂遊びとなっている。表1.1から、ドッジボールは4歳から経験し始め、鬼ごっこは2歳から経験していることがわかる。表2.1から、ドッジボールとサッカーは学童保育ではどの学年でも人気がある。また、保育所の室内遊びではブロック遊びが最も人気があり、トランプ、集団遊びと続いている。一方、学童の室内遊びでは、ブロック、ボードゲーム、コマとなっている。表1.1から、ブロック遊

びは1歳から経験し、2歳以降は常に最も人気がある遊びとなっている。表2.1を見ると、ブロック遊びは学童保育でも学年を問わず人気がある。

女子の場合は、保育所の室外遊びでは男子と同様にドッジボールが最も人気があり、次に鬼ごっこ、氷鬼と続いている。一方、学童の室外遊びでは縄跳びが最も人気があり、次に一輪車、ドッジボールとなっている。表1.2から、ドッジボールは4歳から経験し始め、鬼ごっこは3歳から経験していることがわかる。男子の場合と同様に、ドッジボールは学童保育ではどの学年でも人気がある。また、保育所の室内遊びでは男子とは異なりお絵かきが最も人気があり、折り紙、トランプと続いている。一方、学童の室内遊びでは、お絵かき、折り紙、塗り絵となっている。表1.2から、女子に人気のあるお絵かき遊びは3歳から経験し、4歳から最も人気がある遊びとなっている。また、表2.2を見ると、お絵かきは学童保育でも学年を問わず人気があるが、高学年になるとピアノや漫画に取って代わられるようになる。

以上から、男女ともに5歳児に人気の遊びと小学校低学年に人気の遊びはかなり共通していることがわかる。保育所での遊びの経験が学童での遊びにつながることからすれば、保育所で5歳児後

半までに学童でも共通して行われる遊びを経験しておくことが重要である。保育所とは異なり地域内の広範囲から子どもが集まる学童において、子どもは新たな人間関係を構築する必要がある。そのさいに重要な役割を果たすのが遊びである。遊び方やルールを知っていることで遊びを容易にし、それが新たな人間関係構築のきっかけとなるのである。ドッジボールやサッカー、お絵かきなどの遊びを保育所で十分に経験しておくことで、学童での遊びと円滑につながる事が可能となるであろう。

(2)「保育士(支援員)として、遊びを充実させるために気を付けていることは何ですか」

ここからは、KH Coderによる共起ネットワークとカテゴリ化によって得たカテゴリの結果を確認する。

まず、図1はKH Coderによって抽出した共起ネットワークである。

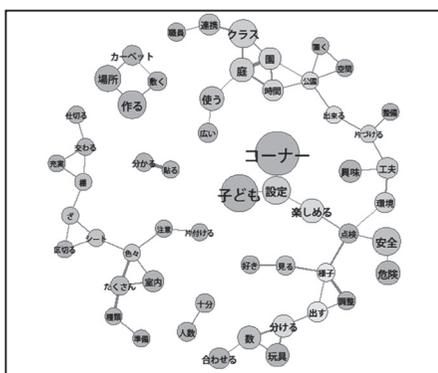


図1.1 「保育士として、遊びを充実させるために気を付けていることは何ですか」の回答に対する共起ネットワーク(媒介中心性)

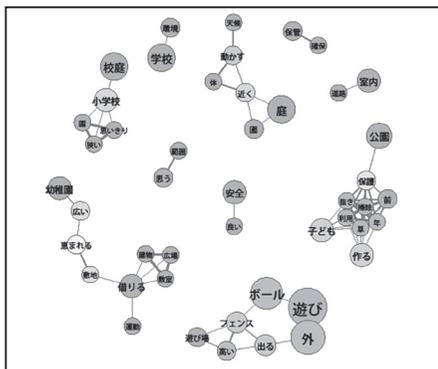


図1.2 「支援員として、遊びを充実させるために気を付けていることは何ですか」の回答に対する共起ネットワーク(媒介中心性)

図1.1から、保育所における遊びの充実のキーワードは「子ども」、「コーナー(保育)」であることがわかる。自由記述には、「ままごとコーナー」、「おもちゃのコーナー」、「絵本コーナー」や「保育室内ではコーナーごとに使うものをまとめ、整理している。」などコーナー保育を表す言葉が多数出現していた。

また、「安全」や「危険」という事故防止に関する視点も、遊びを充実させるために必要であると考えていることがわかる。事故防止に関しては、「子どもたちが安全に安心して過ごせるように、危険なものを置かない。」「安全に配慮したコーナーを用意する。」という記述があった。

とくに、「子ども」が中心的な言葉となっていることは特徴的である。図1.2(学童の結果)では、「子ども」という言葉は出現しているが中心的位置を占めてはいないことから、保育所における「子ども」の重要性があらためて明確になっている。自由記述には、「子どもの発達を理解をし、今の子どもたちの様子や興味・関心を見た上で、道具選びをしていく。」「子どもたちが遊びたくなる環境設定を工夫している。」とあった。

図1.2から、学童での遊びの充実は「外」、「ボール」が重要であることがわかる。学童での子どもに人気のある遊びを整理した表2の結果でも、人気の遊びはドッジボールやサッカーというボールを使う遊びであったことから、学童における遊びの充実には外で体を使う遊びが重要になっていることがわかる。図1.2からも、「公園」、「校庭」、「庭」など室外活動を表すことが多く登場していることがわかる。自由記述には、「近くの公園、広場に出かけて、ドッジボールやサッカーをするようにしています。」「遊びを充実するためには庭が狭いので、校庭を借りてドッジボールやバドミントンをする事が多いです。」というように、ボールを使った遊びや室外遊びに関する記述がみられた。

次に、カテゴリ化によって得たカテゴリを確認していく(表3)。

表3 「保育士として、遊びを充実させるために気を付けていることは何ですか」のカテゴリ化の結果

保育所 (136)	子ども (44)、コーナー (36)、遊び (24)、設定 (22)、おもちゃ (16)、園庭 (16)、他クラス (16)
学童 (84)	遊び (24)、道具 (20)、子ども (20)、砂場 (20)、外 (18)、ボール (15)、ドッジボール (15)

子が遊びのリーダーとなり、低学年の子たちも楽しそうに遊べるようになってきていると思います。」「ドッジボール等は高学年の男子がコートを書いてくれたり、組分けをしてくれたり上手にしてくれますから、他の子も入りやすいと思います。」「ドッジボールとかキックベースなどを取り入れている。外での遊びの中では高学年の子が、下の学年も入れて遊んでくれるから。」「ボール遊びは特に高学年も低学年と遊びやすいから多くやっている。」「ドッジボール、サッカー、キックベースをやるようにしている。自然に中高低学年が集まり遊ぶようになる。」という記述からも、学童保育では高学年が異年齢の遊びを実現する存在となっていることやドッジボールなど異年齢でも遊べる遊びを用意することで異年齢の子どもの交流を実現していることがわかる。

表5 「保育士（支援員）として、異年齢での遊びについて気を付けていることは何ですか」のカテゴリ化の結果

保育所 (136)	異年齢(52)、交流(48)、自然(44)、一緒(40)、遊ぶ(38)、機会(36)、意図(34)、関わり(28)
学童 (84)	子ども(42)、多い(30)、学年(28)、遊び(28)、ドッジボール(22)、高学年(22)、低学年(18)、入れる(14)、一緒(14)

また、抽出したカテゴリを確認すると、共起ネットワークの内容と整合していることがわかる(表5)。保育所では、「交流」、「自然」、「一緒」というような共起ネットワークでも中心であった言葉がカテゴリとして抽出された。また、共起ネットワークでも出現していたが、「意図」というカテゴリが得られた。自由記述では、「ままごとやブロックなど、一緒に遊びやすいものを意図的に用意することがあります。」「意図して、小さいクラスにお手伝いなど異年齢の子とかかわる機会をもちます。」「意図的に月に一度、一緒に遊ぶ機会を設けたり一緒に誕生会をするなどして顔を合わせる機会を作っている。」とあった。保育所での異年齢での遊びは、自然とそうなるようにする側面と、保育士が意図的にそうなるように設定するという側面があることがわかる。

一方、学童のカテゴリも共起ネットワークで中心的な言葉になっていたものであった。「子ども」、「学年」、「遊び」、「ドッジボール」、「高学年」である。遊びを主導していく高学年の存在や多くの学年の子どもが参加できるドッジボールのような

遊びが、学童で異年齢の遊びを実現するうえで重要であることがわかる。

異年齢の遊びについては、保育所ではクラス間の交流や給食のような日々の生活のなかで自然に行われることが重視されている。また、一方で保育士が意図的にそのような遊びを用意することもある。保育所の子どもの発達を鑑みれば、異年齢の遊びを自然に発生するに任せるだけでは難しいことからと思われる。一方、学童では支援員が意図的に異年齢の遊びを用意するのではなく、高学年の存在が重要である。遊びにおいて、高学年が低学年や中学年の子どもを誘ったり、一緒にできる遊びをすることが学童における異年齢の遊びの特徴である。また、ドッジボールやサッカーのような、あらゆる学年の子どもが参加できる遊びをすることが異年齢の遊びになっている。

表1、2から、保育所でも学童でもドッジボールは人気のある遊びであった。学童ではドッジボールやサッカーなどの遊びを異年齢が交流する遊びとして活用しているため、保育所でこうした遊びに慣れておくことで学童での異年齢の遊びに円滑につながる可能性が高くなると思われる。ドッジボールやサッカーを保育所での遊びと学童での遊びをつなぐきっかけとなる遊びという見方が重要になるであろう。

子どもの発達や育ちの観点からすれば、異年齢の遊びは重要である。年長や高学年の子どもにとっては、他者に遊びを教えるということによって自己肯定感や自尊感情を育むきっかけになる。一方で、遊びを教わる年少や年中、低学年の子どもにとっては他者との交流のなかで学ぶこと、理解することを体験するきっかけとなる。あるいは、子ども同士が交流するなかでは、年長や高学年の子どもが年少や年中、低学年の子どもから学ぶこともある。したがって、保育所と学童での異年齢の遊びや遊び方がつながることは、子どもにとって重要なのである。

4. まとめと今後の課題

本稿の目的は、保育所と学童における遊びのつながりに関して実態と課題を明らかにすることであった。分析結果をふまえると、次の3つのことが重要な点として挙げられる。

まず、ドッジボールやサッカーのような具体的な遊びの重要性である。遊びの連続性ということ

からすれば、保育所の遊びが学童の遊びにつながる事が重要である。また、学童は保育所と比べると広範囲の地域から子どもが集まる。そこで子どもが新しい人間関係を構築するさい、遊びが重要な要素となる。遊びを共有できるかどうかが重要になる。保育所ではドッジボールやサッカーは早い段階から経験するため、子どもが遊びに慣れ習熟することが可能となるのみならず、学童でも行われているため遊びの共有がしやすい。すなわち、遊びの連続性が保障できるものである。このように、ドッジボールやサッカーのような遊びは子どもの健康や社会性の育成に重要であることは言うまでもないが、保育所と学童の遊びのつながりという点からも再評価すべきであろう。

次に、保育士と支援員の遊びに対する考え方や進め方について相互に学びあうことの重要さである。分析結果から、保育所と学童では共通する遊びも多く、遊びのつながりが保障されやすい状態であることがわかった。しかし、それぞれに対する考え方には違いがあった。保育所では、楽しさを優先する一方、学童では指導的な介入がある場合もある。子どもが児童期になると、遊びを楽しむだけでなく、勝負事としてとらえ勝ち負けを重視することもある。そのなかで、支援員が勝つための戦略や方法を指導する場面もあるであろう。保育士の立場からすると、こうした対応は時に理解が難しいこともあると思われる。

それゆえ、遊びに対する考え方や進め方の違いは、保育所と学童の遊びのつながりを考えるうえで重要な点になる。保育所と小学校の連携と比べると、保育所と学童の連携は十分ではなかった。また、会議や打ち合わせをして、互いの状況を情報交換することで終わってしまうことも多いようである。そうではなく、保育所と学童での生活や遊びの連続性を保障するためにも、保育士と支援員が遊びについて相互に話し合う、学び合う機会を設けることが求められる。

最後に、子どもの発達の連続性をふまえた遊びのつながりを考えることの重要さである。遊びのつながりを考えるさいには、子どもの発達の連続性が重要になる。しかし、本稿で行った分析からは子どもの発達に関する見解はあまり得られなかった。とくに、学童においては、「保育士（支援員）として、遊びを充実させるために気を付けていることは何ですか」、「保育士（支援員）とし

て、子どもの遊びに関わるさいに気を付けていることは何ですか」、「保育士（支援員）として、異年齢での遊びについて気を付けていることは何ですか」について、子どもの発達に関する記述はほぼ見られなかった。

しかし、学童においても子どもの発達は重要である。『放課後児童クラブ運営指針』の第2章では、「第2章 事業の対象となる子どもの発達」とある。ここでは、「1. 子どもの発達と児童期」、「2. 児童期の発達の特徴」、「3. 児童期の発達過程と発達領域」、「4. 児童期の遊びと発達」、「5. 子どもの発達過程を踏まえた育成支援における配慮事項」が項目として挙げられている。発達に関する記述があまりなかったが、4にあるように、児童期の遊びを考えるさいには子どもの発達を考慮する必要があるのである。また、児童期の発達を理解するためにも、乳幼児期の子どもの発達に関する知見も必要である。低学年の子どものなかには、発達の個人差から、年長や年中の発達段階にある者もいる。こうした場合、子どもの発達段階に応じた育成支援が必要になるためである。保育所と学童の遊びのつながりを十分にするためにも、保育士は児童期の、支援員は乳幼児期の子どもの発達に関する知見を学ぶ必要がある。

本稿では、同一地域内の保育所と学童クラブを調査対象として選定したが、保育所も学童も地域によって多様である。首都圏のような都会と地方では保育所や学童を取り巻く人的物的環境が異なるため、それぞれの遊びも異なる可能性がある。したがって、本稿の結果を一般化するためには、より広範囲な研究が必要となる。また、本稿は予備的研究という位置づけであったため、本稿の結果をふまえて質問項目の追加、修正をしたうえでのさらなる研究が必要になる。これらは今後の課題としたい。

参考・引用文献

- 1) 赤星敦美・岩坂美保・山本善積、「山口県の学童保育所における遊び空間」、『山口大学教育学部研究論叢第3部芸術・体育・教育・心理』(61)、389-399 (2011)
- 2) 林幹士、「学童保育における保育者は子ども同士をどのようにつなげようとしているのか?」、『保育学研究』51(2)、245-256 (2013)

- 3) 厚生労働省、『放課後児童クラブ運営指針』(2014)
- 4) 厚生労働省、『保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ』(2016)
- 5) 厚生労働省、『保育所保育指針 平成29年告示』(2017)
- 6) 中川春香・山田あすか、「学童保育拠点における遊び種類に着目した適正規模に関する研究：都内の学童保育拠点への調査にもとづく考察」、『日本建築学会計画系論文集』80(707)、31-41 (2015)
- 7) 中田周作、「学童保育のあり方に関する自由記述の分析」、『中国学園紀要』(10)、199-207 (2011)
- 8) 代田盛一郎、「学童保育における遊びとその指導に関する実践研究(1)：保育記録の分析を通して」、『創発：大阪健康福祉短期大学紀要』(9)、37-46 (2010)
- 9) 代田盛一郎、「学童保育における遊びとその指導に関する実践研究(2)：ルールが顕在化した遊びとその指導」、『創発：大阪健康福祉短期大学紀要』(10)、45-52 (2011)
- 10) 上村裕樹・坂本大輔・伊勢正明、「学童保育における指導員の困難性に関する研究：学童保育所指導員を対象とした質問紙調査の結果から」、『帯广大谷短期大学紀要』(50)、59-67 (2013)
- 11) 山田あすか・渡邊左帆、「学童保育施設におけるゾーンのつくりと児童の遊び様態の関係性についての事例的考察」、『日本建築学会技術報告集』17(35)、271-276 (2011)

付記

本論文は、第6回日本学童保育学会研究大会にて口頭発表した内容を加筆・修正したものである。